

中ノ川原遺跡（第2次）発掘調査報告  
－三重県松阪市八重田町－

1998・3

三重県埋蔵文化財センター

## 序

三重県埋蔵文化財センターでは、埋蔵文化財保護行政の一環として、各開発関係部局の事業予定地域内の埋蔵文化財の確認とその保護に努めてまいりました。

ここに報告する松阪市八重田町所在の中ノ川原遺跡は、平成9年度における堀坂川小規模河川改修事業に先立ち、発掘調査を実施し、記録保存したものであります。

今回の調査によって、堀坂川周辺地域の遺跡群の一つが、部分的にはありますが判明いたしました。周囲の遺跡の調査成果とともに当地域の歴史を知る上でその一助になるものと確信しております。

当地域には我々の祖先の残した数多くの歴史的遺産があります。今後それらを貴重な財産として保護し、後世に伝えていくと共に、今後の文化の向上、発展に活用していかねばなりません。そして、我々の公共財産である歴史的遺産と公共事業との共存・共栄の道を模索しなければならないと考えています。

調査にあたっては、三重県土木部河川課、松阪土木事務所、松阪市教育委員会をはじめ、地元地区の多くの方々の惜しみないご理解とご協力を賜り、文末ながら記して深く感謝申し上げます。

平成10年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 奥村敏夫

# 例 言

1. 本書は、平成9年度二級河川堀坂川小規模河川改修事業に伴って実施した中ノ川原（なかのがわら）遺跡第2次調査の報告書である。
2. 中ノ川原遺跡は、三重県松阪市八重田町字中ノ川原・福丸に位置している。
3. 調査体制は、下記によった。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター 調査第一課
	第3係長 野原 宏司（調整）
	上事 松葉 和也
	技師 萩原 義彦

4. 当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行った。  
また、本文の執筆・編集は、各担当者があたり、文末に執筆者名を記し、文責を明記した。
5. 本書で使用した方位は、全て磁北で示している。
6. 本書で使用した遺構表示記号は、以下の通りである。

SD： 溝

7. 調査にあたっては、地元伊勢寺・八重田地区をはじめ、三重県上木部河川課、松阪土木事務所、松阪市教育委員会からの協力を得た。また、現地作業については、以下の方々にご尽力いただいた。記して感謝の意を表したい。

奥田 益郎・笠原美恵子・加藤 君子・加藤 しげ・加藤ヨシエ  
川上 齊・川北 タカ・川北 久代・小泉 千鶴・小泉美千代  
小松本イシエ・佐波 清甲・新山 かつ・高山 敏子・辻 錦洋  
辻 喜美子・西川 紀枝・西之坊美代子・沼田 英子・堀川佐智代

(50音順、敬称略)

8. スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。  
各国の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

## 本文目次

I 前 言	1
II 位置と環境	2
III 調査の成果	4
IV 結 語	11

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 遺跡地形図	3
第3図 調査区位置図	4
第4図 遺構平面図	5
第5図 北壁土層図	6
第6図 西壁土層図	7
第7図 遺物実測図(1)	8
第8図 遺物実測図(2)	9
第9図 銭貨拓本	10

## 表目次

第1表 出土銭貨観察表	10
第2表 遺物観察表	12

## 図版目次

図版1 調査前風景(北東から)	15
作業風景(北東から)	15
図版2 調査区北半(北東から)	16
調査区全景(南西から)	16
図版3 東旧河道(南西から)	17
S D 1(北東から)	17
図版4 出土遺物(1)	18
図版5 出土遺物(2)	19
図版6 出土遺物(3)	20
図版7 出土遺物(4)	21
図版8 出土遺物(5)	22

# I 前 言

## 1 調査の契機

今回の中ノ川原遺跡（第2次）の調査は、平成8年度の第1次調査と同様、二級河川堀坂川小規模河川改修事業に伴う発掘調査である。

第1次調査では、調査面積約500㎡で縄文時代から平安時代の遺構・遺物を確認している。

今回は、平成8年度の試掘調査によって得られた結果をもとに、約1,600㎡を発掘調査の対象とした。

## 2 調査経過

調査地は、堀坂川の堤防部分に位置し、現況は竹林を中心とする荒蕪地である。事業予定地が南北に細長く、調査開始前から排土の搬出に困難が予想されたため、調査地を南北に分け、重機による表土掘削を2分した。また、調査地は堀坂川の隣接地であり、河川の護岸及び隣接地の崩落を避けるため、調査面積の縮小をよぎなくされた。

現地の発掘調査は、平成9年5月6日から開始し、同年6月26日に終了した。調査期間は約2ヶ月に及び、最終的な調査面積は、約1,400㎡である。

## 3 調査日誌（抄）

- 5/6 調査区北東部から重機による表土掘削開始。東旧河道を検出。
- 5/7 引き続き表土掘削。東旧河道の西屑を検出。
- 5/8 表土掘削。西旧河道の東屑・SD1を確認。
- 5/9 北側調査区表土掘削終了。
- 5/12 地区設定。
- 5/13 調査区西壁精査・調査区北側から遺構検出。
- 5/14・15 雨天作業中止。
- 5/16 調査区北壁断面図作成。SD1検出。
- 5/19 東旧河道を遺構面で検出。
- 5/20 東旧河道にトレンチを3箇所設定し、掘り下げ、東旧河道の堆積状況を確認。
- 5/21・22・23 東旧河道を重機で掘削。西旧河道

を人力で掘削。

- 5/26 重機で掘削した東旧河道を精査。
- 5/27・28・29 前日と同様の作業。
- 5/30 午後から東旧河道掘削。
- 6/2 引き続き東旧河道掘削。
- 6/3 午前、東旧河道掘削。午後、雨天作業中止。
- 6/4 雨天作業中止。
- 6/5 写真撮影のため、調査区掃除。
- 6/6・9 雨天作業中止。
- 6/10 午前中、写真撮影のため掃除。午後から調査区北側・南側から全景写真・SD1完掘写真撮影。
- 6/11 平板による遺構実測。
- 6/12 雨天作業中止。
- 6/13 南北に2分した調査区南側から重機による掘削開始。
- 6/16 雨天作業中止。
- 6/17・18 重機による掘削。
- 6/19 重機による掘削。調査区西壁及び遺構精査。
- 6/20 台風7号のため作業中止。
- 6/23 午前中、雨天作業中止。午後より台風による崩落土の撤去。
- 6/24 写真撮影のため掃除。西壁断面図作成。
- 6/25 全景撮影。西壁・SD1断面図作成。
- 6/26 平板による実測。終了後道具撤収。
- 7/1 松阪土木事務所に現地引き渡し。

## 4 文化財保護法等による諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等に行っている。

- ・法第57条の3第1項（文化庁長官宛）  
平成9年4月22日付教文第1077号（県知事通知）
- ・法第98条の2第1項（文化庁長官宛）  
平成9年5月9日付教文第987号（県教育長通知）
- ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署署長宛）  
平成9年7月29日付教文第6-60号（県教育長通知）

## II 位置と環境

松阪市は、伊勢平野のほぼ中央部に位置する。一般に西部は山地からなり、東部は沖積平野となっている。また、山地と平野の間には西部の山地に源を発する中小の河川によって形成された標高20~100mの扇状地が広がる。

中ノ川原遺跡は、西に堀坂山を望む標高30mの堀坂川右岸の扇状地に位置する。堀坂川によって形成された扇状地周辺には、弥生時代以降の遺跡が密集している。

この堀坂川流域を中心に周辺の遺跡を時代別に概述する。

### 1 縄文時代

堀坂川流域の縄文時代の遺跡は、確認されていないものの縄文土器片やササカイト片が出土している。一方、飯内川流域には、前期の土器が出土する新田町遺跡（1）や、中期の竪穴住居が確認されている

追上遺跡（2）がある。

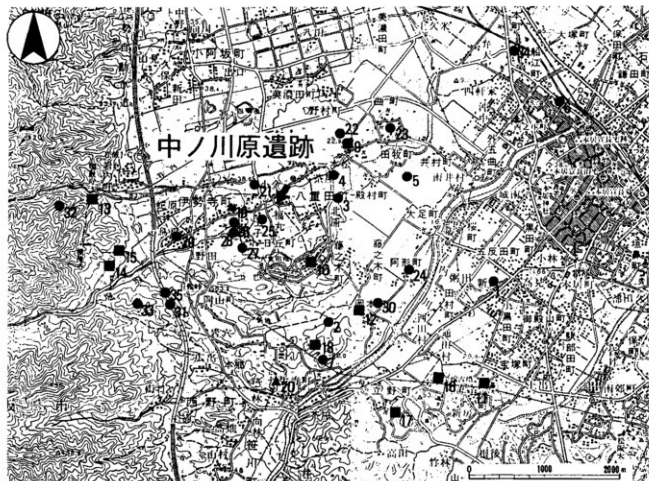
### 2 弥生時代

弥生時代になると遺跡の数は急増する。中期の遺跡である田高田遺跡（3）、城垣内遺跡（4）がある。後期には、バレススタイルの壺形土器が出土した蛸遺跡（5）、川井町遺跡（6）、竪穴住居が確認された川原表B遺跡（7）、多数の弥生土器や小銅鐸、多くの竪穴住居が確認された草山遺跡（8）がある。

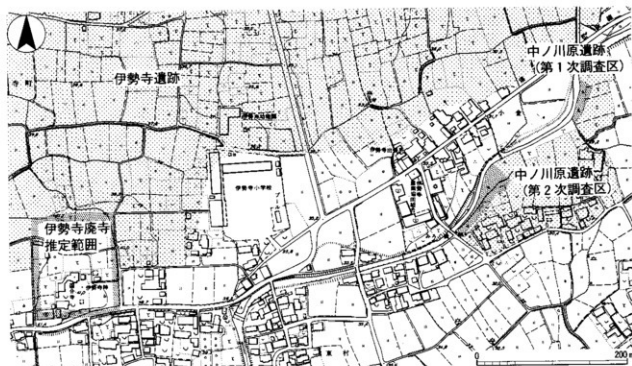
### 3 古墳時代

前期には、二重口縁の底部穿孔壺型土器が多数出土した深長古墳群（9）がある。

中期には、調査地から南に約1kmにある八重田古墳群（10）、南東に約4kmにある宝塚古墳群（11）がある。宝塚古墳群には、伊勢国最大で全長95mの前方後円墳がある。



第1図 遺跡位置図 (1:50,000) 国土地理院『松阪』『二本木』(1:50,000)から



第2図 遺跡地形図 (1:5,000)

南東約1.5kmには、帆立貝式古墳を含む高地蔵古墳群 (12) などが造営される。

後期になると、西部の丘陵上に瑞巖寺 (13)、上文殊 (14)、下文殊 (15)、田村 (16)、立野 (17)、常光坊谷 (18) などの群集墳がある。なかでも常光坊谷古墳群は、形象埴輪を数多く出土しており当時の生活状況を知るうえで貴重である。

また、当地域に広大な規模を有する古墳が造営されるのは、かなりの有力者が存在していたものと考えられる。

#### 4 奈良～平安時代

調査地にほど近い伊勢寺廃寺 (19) がある。過去の調査から東西150m、南北180mの方位に乗った地割りが残り、複弁蓮華文の軒丸瓦や重弧文の軒平瓦などが出土し、寺域を区画する溝などが確認されている。南に約2.5kmの丹生寺廃寺 (20) では、伊勢寺廃寺と同様の布目瓦が出土し、方形の台地状区画や土塁遺構が残っている。

この時期における寺院建築は、権力の象徴を意味すると考えられ、当地域に何らかの権力基盤が存在したことが考えられる。

また、南北約1km、東西約1.5kmの広大な規模をもつ伊勢寺遺跡 (21)、大溝や堅穴住居、斎串・土

馬などの祭祀関連遺物が出土した杉垣内遺跡 (22)、曲遺跡 (23)、阿形遺跡 (24)、大坪遺跡 (25)、大垣内遺跡 (26)、向王子B遺跡 (27)、王子遺跡 (28)、鳥戸遺跡 (29)、十数棟の掘立柱建物が確認された打田遺跡 (30) がある。

上記した遺跡には、時代をまたがるものが多く、当地域は古代から中世にかけて非常に繁栄していたことが窺える。

#### 5 鎌倉～室町時代

鎌倉時代以降は、伊勢神宮の神領としての地名が残っている。また、室町時代に入って伊勢国司北畠氏の支配下におかれた。そのため、岩内城 (31)、伊勢寺城 (32)、立野城 (33)、船江城 (34) などが築城された。このことから当地が伊勢国内において重要な地域であったと考えられる。

昭和60年に伊勢寺町横尾で発掘調査された横尾墳墓群 (35) は、丘陵全域が墓域となっており、室町時代を中心とした時期の五輪塔が多数出土した。これらの墓域の被葬者と当地域との関連が予想される。

以上、堀坂川周辺地域における遺跡を中心に概観したが、古代から当地域が文化において先進性を有していることが窺え、歴史的に重要な地域である。

(萩原彦彦)

### III 調査の成果

#### 1 調査の方法と層序

今回の調査は、中ノ川原遺跡の第2次調査にあたる。小地区設定については、平成8年度の第1次調査地点から南東へ100m以上離れているため、方向・地区番号ともに第2次調査独自に設定した。小地区は4m四方で、その番号は西から東へa～g、北から南へ1～25である。

本遺跡は、扇状地の川沿いに立地している。現況は竹林と荒蕪地であるが、護岸部分を中心に河川改修に伴う盛土が厚く堆積している。また、昭和の護岸工事の際に掘削を受けている。調査前時点の基本層序は次のとおりである。

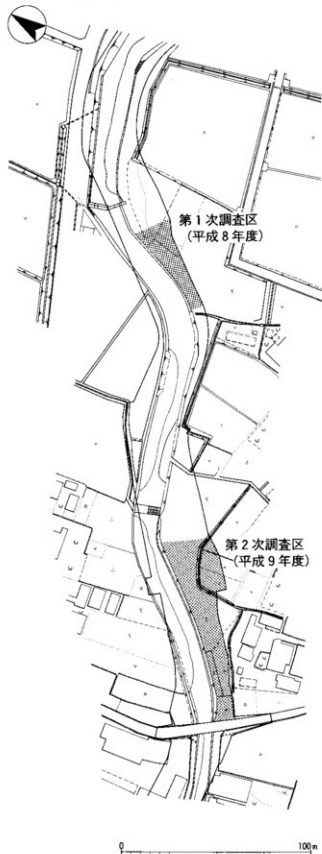
- I 客土
- II 黄褐色砂層
- III 黒褐色粘質土
- IV 黄褐色粘質土（遺構検出面）
- V 黄褐色砂質土

Iは過去2、3年内の河川改修工事に伴うもの。IIは堀坂川による堆積層と考えられ、調査区全体に見られる。IIIは遺物包含層、IV上面で遺構を検出した。

#### 2 遺構

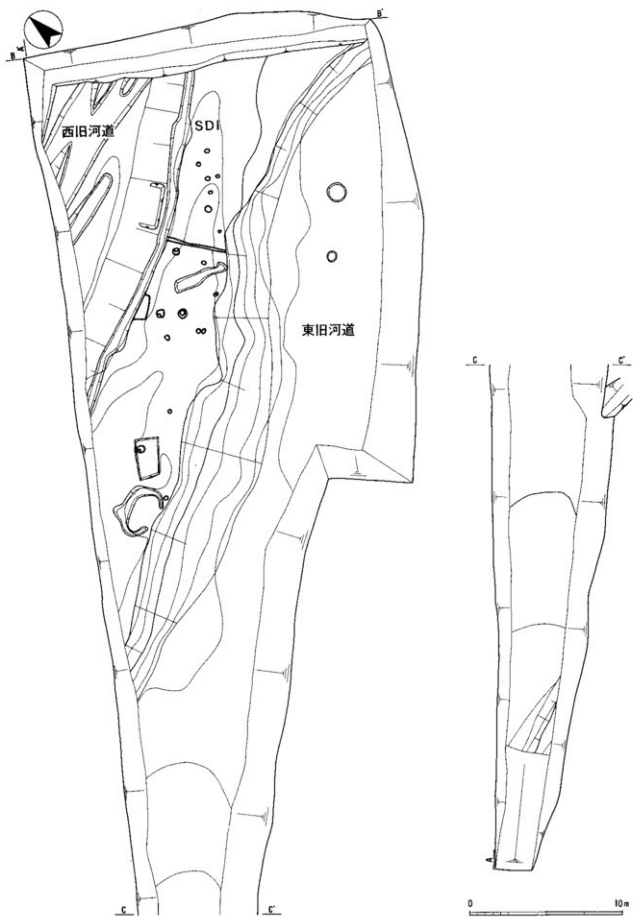
調査区の半分以上を東西2本の旧河道が占める。他には溝とピットを検出した。

SD1 西旧河道の肩に沿って検出した。幅約0.4mで、長さ約15mを検出したが、両端ともに調査区外へ延びる。方向はN65°Eである。拳人から人頭大ほどの礫が出土したが、出土位置には規則性を見出すことができなかった。底の形や深さが一定しないことから、自然にできたものであろう。断面観察から、西旧河道の埋没過程の一時期の溝だといえる。出土遺物には10数個の山茶碗があり、藤澤良祐氏による編年<sup>①</sup>（以下、藤澤編年）の第5型式新段階～第7型式に比定できる。したがって13世紀代の溝であると考えられる。



第3図 調査区位置図 (1:2,000)

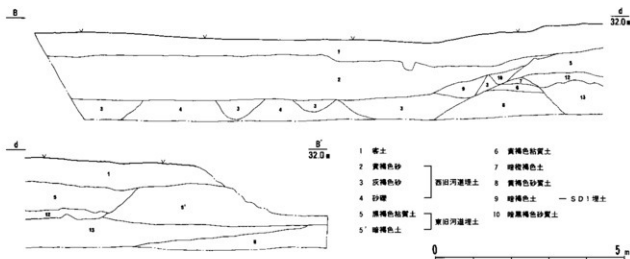




第4図 遺構平面図 (1:250)

**東旧河道** 調査区の半分以上を占める。現在の堀板川は南西方向から調査区に向かい、手前で北側に緩いカーブを描く。しかし、曲がらずに直進すると、この東旧河道を通ることになる。川幅は推定15m、深さ1mほど、方向はN65°Eである。出土遺物は縄文時代中期から11世紀初頭までのものがある。しかし、縄文時代の遺物は局所的であり、また、その包含層は埋土とは考えにくい。したがって、11世紀初め頃までに埋没した旧河道であると考えられる。

**西旧河道** 現在の堀板川河道とは護岸堤防のみを隔てる位置にある。その方向、出土遺物からみても、護岸堤防が築かれるまでは現河道の一部であったと考えられる。出土遺物は13世紀以降のもので、この頃に河道は北寄りに流れを変えたのであろう。ピット 数個を確認したが、位置関係からは建物などの構造物を推定することはできない。また、出土遺物はわずかである。いずれも細片であり、時期を決定するにいたらなかった。(松葉和也)



第5図 北壁土層図 (1:100)

### 3 遺物

出土遺物は、調査面積に対して少なくコンテナ16箱である。調査区全体では縄文時代から中世までの遺物が出土している。その多くは、東旧河道から出土したものである。以下には遺構ごとに報告する。なお、遺物の詳細については遺物観察表(第2表)・出土銭貨観察表(第1表)を参照されたい。

#### A 東旧河道出土遺物

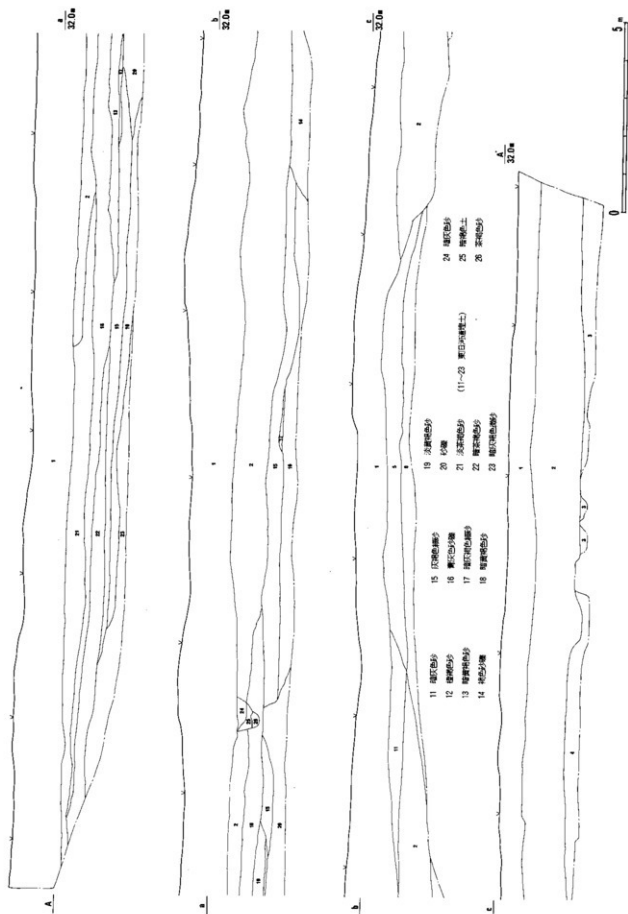
縄文時代から平安時代までの遺物が出土した。遺物の量は一番多い。

**縄文土器** 1・2はキャリパー形を呈する口縁部片である。1は縄文を、2は燃糸文を地文に持ち、口唇下に沈線を巡らせる。1は一条の平行沈線らしく、2は平行沈線と波状沈線を一条ずつ施す。3は、厚手でやや肥厚する口縁部片である。竹管らしい刺突文はO字からC字を呈する。二条の刺突列の間にへら状工具による山形文を施す。4は縄文地に、5は

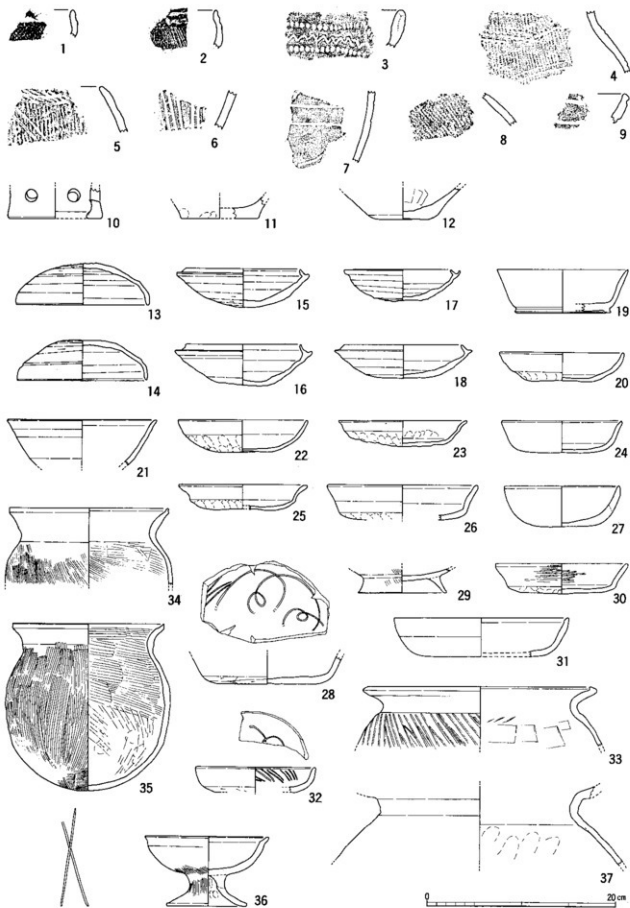
燃糸文地に竹管による連弧文を施す。6は無文地に垂下する沈線が認められる体下部片である。7は横位に沈線を、8は単節Lの斜縄文を施す。9は口縁部で、沈線間を磨いた粘土のはみ出しが認められる。10は脚台付土器の脚台部片である。11は深鉢と思われる土器の底部である。2の胎土と色調が近似しており、同一個体である可能性も考えられる。9以外については、おおよそ船元式から北白川C式に比定することができ、中期後半のものとする。9は後期前半までのものであろう。(松葉和也)

**弥生土器** 壺12は底部のみであり、磨滅が著しいため判断としない。弥生土器と思われる。

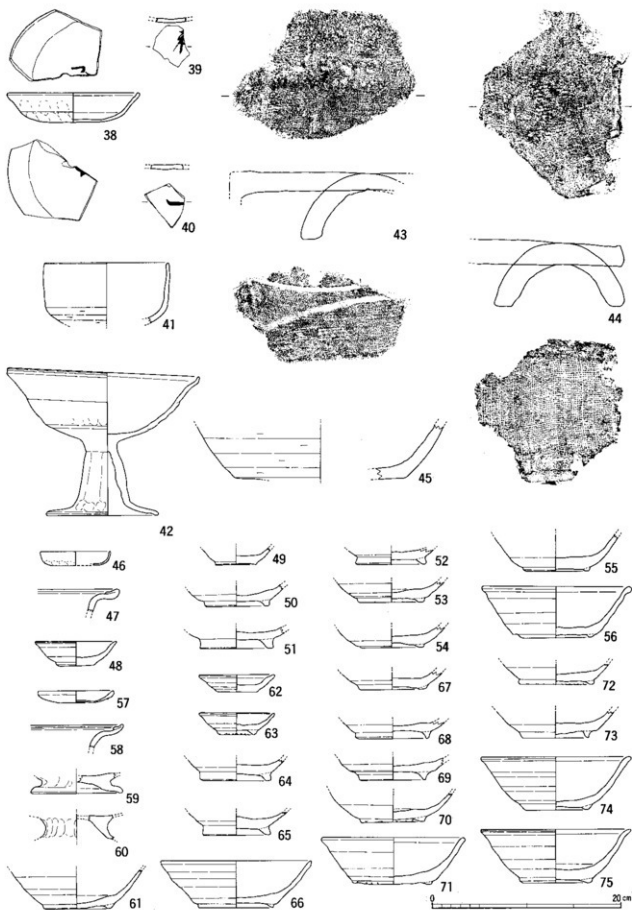
**古墳時代の遺物** 須恵器杯蓋13・14、須恵器杯身15～18、土師器高杯42が出土している。須恵器杯蓋・杯身ともに全て完形であり、田辺昭三氏による編年<sup>9)</sup>(以下、田辺編年)のTK209形式と考えられる。高杯42は、口縁部が外反して開き、口縁端部で上方に突き出す。脚部から裾部にかけてほぼ垂直に下り、



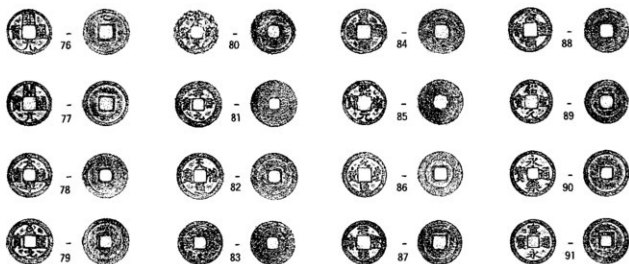
第6図 西壁土層図 (1:100)



第7圖 遺物実測図(1) (1:4)



第8图 遺物実測図(2) (1:4)



第9図 銭貨拓本(1:2)

No.	銭名	銭径(A)/銭径(B) (mm)	内径(C)/内径(D) (mm)	銭厚 (mm)	量目 (g)	初铸年	No.	銭名	銭径(A)/銭径(B) (mm)	内径(C)/内径(D) (mm)	銭厚 (mm)	量目 (g)	初铸年
76	開元通寶	24.8 24.8	21.9 21.4	1.45	3.43	621	84	皇宋通寶	24.2 24.7	20.0 20.3	1.2	3.39	1038
77	開元通寶	24.4 24.4	20.8 20.7	1.52	3.51	621	85	熙寧元寶	24.18 24.2	20.28 20.5	1.52	4.27	1068
78	太平通寶	24.1 24.3	19.2 19.0	1.1	2.92	976	86	元豊通寶	24.4 24.3	19.2 19.2	1.2	3.62	1078
79	至道元寶	26.55 25.3	18.6 19.6	1.2	3.63	995	87	元豊通寶	24.15 24.08	19.6 18.6	1.35	4.15	1078
80	景德元寶	23.9 23.9	19.0 18.3	1.2	2.63	1004	88	元豊通寶	23.92 23.9	19.7 18.4	1.25	3.82	1078
81	祥符元寶	25.3 25.2	18.3 18.4	1.25	4.09	1009	89	紹聖元寶	23.7 23.6	19.0 19.3	1.3	3.21	1094
82	天禧通寶	25.3 25.3	20.5 19.8	1.1	3.53	1017	90	永樂通寶	24.8 24.8	20.8 21.1	1.45	3.81	1408
83	皇宋通寶	24.1 24.1	18.8 19.9	1.1	3.47	1038	91	寛永通寶	24.5 24.5	20.3 20.3	1.08	2.10	1636

第1表 出土銭貨観察表

(A)・(C)は縦、(B)・(D)は横、内径は外縁部分を除いたものである。

強く屈曲して外方に開いている。須恵器と同時期と考えられる。

**奈良時代の遺物** 須恵器杯身が出土している。須恵器杯身19は、口縁部がやや開き気味に立ち上がり、平城宮Ⅲ期と考えられる。

**平安時代の遺物** 土師器杯20・22～28・30～32・38～40、土師器甕33～35・37、土師器台付杯36、緑釉陶器21が出土している。土師器杯は、口縁部が外反するもの、底径が小さく長めの口縁部が外方へまっすぐに開くもの、口縁部が内弯気味に立ち上がるものがある。緑釉陶器は、口縁部のみであるが、白色の胎土に淡緑色の釉が全面に施釉されているもので、

平安京出土緑釉陶器のⅠ期新型式とみられる。土師器甕は、小型甕34・35であり、いずれも口縁端部の外側にシャープな稜をもつ端面を作り、口縁部中程がやや膨らんでいる。<sup>④</sup>

#### B 西旧河道出土遺物

山茶碗49～56は、尾張産のものがほとんどであり、藤澤編年による第5～7形式に分類できる。また山皿についても尾張産で、第5形式に位置する。土師器鍋47は、口縁端部を内側に折り曲げ、幅広い扁平な口縁を有している。伊藤裕俣氏の南伊勢系土師器鍋編年<sup>⑤</sup>(以下、伊藤編年)の第2段階c形式と考えられる。土師器小皿46は、口径7.6cm、内外面を

ナデで調整されている。西旧河道の遺物は、13世紀以降のものである。

### C S D I 出土遺物

山茶碗・山皿・土師器小皿57・土師器鍋58・土師器台付杯59・60が出土した。山茶碗61・64～75は、藤澤編年による第5～7形式に分類できる。また山皿についても、第5形式である。

## IV 結 語

今回の調査は、河川改修工事の予定地内であるため南北方向に細長い調査区となり、中ノ川原遺跡の一部分を調査したに過ぎない。

調査区の位置は堀坂川の護岸堤防隣接地であり、旧河道がある程度検出されることは予想できた。しかし、調査の結果、その大部分が堀坂川の旧河道であることが判明した。他の遺構を検出したのは、東西旧河道の間の狭い範囲に限られ、溝とピット数か所を確認したのみである。いずれも生活の跡を印象付けるものではない。調査部分は集落内ではなく、川とその岸にあたる部分であったと考える。

### D 調査区客土出土遺物

遺物は、調査対象地の客土層を重機で掘削する際に出土した。出土遺物は全て銭貨で総数16枚である。開元通寶（初鑄621年）から寛永通寶（初鑄1636年）がある。遺構に伴うものではないが、参考資料として掲載した。

（萩原義彦）

一方、旧河道からは、まとまった量の遺物が出土している。東旧河道からは6世紀半ばから11世紀前半までのものが、西旧河道からは13世紀以降のものが出土している。したがって、11世紀後半から12世紀の期間に河道は北寄りになったものと考えられる。

今回の調査では、調査区が遺跡縁辺部ということもあり、中ノ川原遺跡の性格や全体像を全て把握することが出来なかった。しかし、出土遺物から中ノ川原遺跡は、付近に所在する伊勢寺遺跡・伊勢寺廃寺等の数多くの遺跡と関連するものと考えられる。

（松葉和也・萩原義彦）

#### 【註・参考文献】

- ① 藤原良祐「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第3号、三重県埋蔵文化財センター、1994年）。
- ② 田辺昭二『陶色古窯址群Ⅰ』（平安学園考古学クラブ、1966年）。
- ③ 三重県考古学調査事務所「香宮跡の土師器」（『三重県考古学調査事務所年報1984 史跡 香宮跡 — 発掘調査概要 — 』、三重県考古学調査事務所、1985年）。
- ④ 伊藤裕徳「南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Miehistory』vol.1、三重県史学文化研究会、1990年）。
- 伊藤裕徳『岩出地区内遺跡群発掘調査報告Ⅱ』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）。

上記の他、堀田哲也・倉田直純ほか『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』（三重県埋蔵文化財センター、1990年）、泉拓良「船元・里木式土器様式」（『縄文土器大観3中期Ⅱ』、1988年）、泉拓良ほか「第1部第3章 遺物」（『京大大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ — 北白川辺分町縄文遺跡の調査 — 』、京大大学埋蔵文化財研究センター、1985年）、小玉道明・谷本鋭次・山沢義貴「東庄内B遺跡」（『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』、日本道路公団名古屋支社・三重県教育委員会、1970年）、永井久美男『中世の出土銭 — 出土銭の調査と分類 — 』（兵庫県埋蔵調査会、1994年）を参考にした。

第2表 出土遺物観察表№1

報告番号	登録No	器 種	出土位置 遺 構	法 量 (cm)		成形・技法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	残存度	備 考
				口径	器高						
1	020-04	縄文土器	東田河遺	-	-	縄文単節Rのち沈線	やや粗	並	にぶい黄褐 10YR7/2	-	
2	020-03	縄文土器	東田河遺	-	-	燃赤文のち沈線	やや粗	並	明赤褐 5YR5/6	-	
3	010-04	縄文土器	東田河遺	-	-	竹管刺突文、へら掻沈線	粗	並	灰褐 7.5YR4/2	-	
4	010-03	縄文土器	東田河遺	-	-	縄文のち竹管透弧文	粗	並	灰黄褐 10YR5/2	-	
5	011-02	縄文土器	東田河遺	-	-	燃赤文のち竹管透弧文	粗	並	にぶい黄褐 10YR6/3	-	
6	011-03	縄文土器	東田河遺	-	-	沈線	やや粗	良	にぶい黄褐 10YR5/3	-	
7	010-05	縄文土器	東田河遺	-	-	沈線	粗	並	灰黄褐 10YR4/2	-	
8	011-04	縄文土器	東田河遺	-	-	単節L縄文	粗	並	灰黄褐 10YR5/2	-	
9	011-09	縄文土器	東田河遺	-	-	沈線のち磨き	粗	並	にぶい褐 7.5YR5/3	-	
10	012-02	縄文土器 脚台付 土器	東田河遺	底径 8.0	残高 3.3	内外面ナデ	粗	並	にぶい黄 10YR1/4	脚台部 のみ	
11	010-01	縄文土器 深鉢	東田河遺	底径 8.0	-	外面オサエ、ナデ 内面ナデ	粗	良	明赤褐 5YR5/6	底部のみ	
12	008-01	弥生土器 壺	東田河遺	底径 5.3	-	内面底部工具によるナデ	やや粗	並	にぶい黄褐 10YR7/2	底部のみ	
13	001-01	須恵器 杯蓋	東田河遺	14.0	4.3	外面ロクロケズリ・ナデ 内面ロクロナデ	やや粗	並	灰 N6/0	ほぼ完 形	
14	001-06	須恵器 杯蓋	東田河遺	13.7	4.3	外面ロクロケズリ・ナデ 内面ロクロナデ	密	並	灰白 5Y8/1	ほぼ完 形	
15	001-02	須恵器 杯身	東田河遺	14.1	4.1	外面ロクロケズリ・ナデ 内面ロクロナデ	粗	並	オリーブ灰 2.5GY6/1	ほぼ完 形	
16	020-01	須恵器 杯身	東田河遺	12.1	4.3	外面底部ロクロケズリ、外 面口縁部～内面ロクロナデ	密	良好	灰白 5Y8/1	完形	底部のひずみが大きい
17	006-04	須恵器 杯身	東田河遺	12.1	3.4	外面底部ロクロケズリ、外 面口縁部～内面ロクロナデ	密	良	灰 5Y4/1	ほぼ完 形	
18	004-02	須恵器 杯身	東田河遺	14.6	3.5	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ	やや密	良	灰 N5/0	約40%	
19	022-02	須恵器 杯身	東田河遺	14.0	3.6	外面ナデ	密	良	灰 5Y4/1	約80%	
20	006-01	土師器 杯	東田河遺	13.0	3.1	外面底部指オサエ ナデ 内面ナデ	密	やや不良	灰褐～黒褐 7.5YR4/2	約90%	
21	006-05	緑釉陶器 碗	東田河遺	推定 15.6	残高 4.8	外面ナデ・オサエ 内面ナデ	密	良	淡黄 2.5Y8/3	口縁部 1/12残	釉薬・淡黄7.5Y7/3
22	019-01	土師器 杯	東田河遺	復元径 13.8	3.4	外面ナデ、オサエ 内面ナデ	密	良	淡黄褐 7.5YR8/3	約40%	
23	001-03	土師器 杯	東田河遺	13.6	2.8	外面口縁部ナデ・指オサエ 内面ナデ	密	並	淡黄褐 10YR8/3	ほぼ完 形	
24	001-05	土師器 杯	東田河遺	12.8	3.4	外面ナデ 内面ナデ	やや粗	並	淡黄褐 7.5YR8/3	ほぼ完 形	内外面にスズが多く付着
25	019-04	土師器 杯	東田河遺	13.6	2.6	外面ナデ 内面ナデ	密	並	淡黄 2.5Y8/3	ほぼ完 形	
26	019-03	土師器 杯	東田河遺	16.0	-	外面ナデ 内面ナデ	密	並	淡黄褐 7.5YR8/3	半完形	
27	001-04	土師器 杯	東田河遺	12.3	4.3	口縁部内外面ナデ	やや粗	並	にぶい褐 7.5YR7/4	約60%	
28	015-02	土師器 杯	東田河遺	-	残高 3.0	外面ケズリ・ナデ 内面ナデ	やや密	並	橙 5YR7/6	約40%	内面底部に横説状焼文



第2表 出土遺物観察表No.2

報告書 番号	登録No.	器 種	出土位置 遺 跡	法 差 (cm)		成形・技法の特徴	胎土	焼成	色 調	残存度	備 考
				口径	器高						
29	013-04	土師器 台付杯	東田河道	底径 9.0	—	外面ナデ 内面ナデ・ハケ	やや粗	良	浅黄緑 10YR8/3	脚部の み	
30	013-08	土師器 杯	東田河道	13.8	3.2	外面ケズリ・ミガキ、内面 ミガキ	やや密	並	にぶい緑 5YR7/4	約50%	
31	019-02	土師器 杯	東田河道	18.6	4.1	外面オサエ、ナデ 内面ナデ	密	並	浅黄緑 7.5YR8/3	半定形	
32	015-03	土師器 杯	東田河道	12.4	2.7	外面体部へ内面ナデ 外面底部ケズリ・ナデ	密	良	緑 2.5YR7/6	約40%	内面底部に糠殻状燻文
33	003-01	土師器 壺	東田河道	推定 24.8	残高 6.2	外面口縁部ナデ・体部ハケ メ、内面板ナデ	やや粗	良	淡黄 2.5YR8/3	口縁部 1/5	
34	003-02	土師器 壺	東田河道	推定 16.8	残高 8.0	外面口縁部ナデ・体部ハケ 内面ハケ	やや粗	並	淡黄 5YR8/3	口縁部 1/8 残	
35	021-01	土師器 壺	東田河道	推定 16.0	17.7	外面ハケ、内面底部ハケへ ヘラケズリ	やや密	並	淡黄 5YR8/3	約50%	外面底部にヘラによる ×印あり
36	002-01	土師器 高杯	東田河道	13.4	7.4	外面口縁部ナデ、脚部ハケ 内面ナデ	粗	並	灰白 10YR8/2	約60%	
37	006-02	土師器 壺	東田河道	—	残高 8.4	外面口縁部・体部ナデ 内面口縁部ナデ、体部オサエ・ナデ	粗	不良	灰白 2.5YR8/2	口縁部 1/4	
38	019-06	土師器 杯	東田河道	14.0	3.1	外面ナデ 内面ナデ	密	並	浅黄緑 7.5YR8/3	約40%	
39	005-05	土師器 杯?	東田河道	—	—		やや粗	良	緑 5YR7/8	底部一 部のみ	底部に墨書あり
40	015-01	土師器 杯?	東田河道	—	—	外面オサエ、内面ナデ	密	並	緑 5YR6/6	底部一 部のみ	外面に墨書あり
41	013-02	土師器 杯	東田河道	12.7	残高 5.4	外面口縁部ナデ、口縁部ケ ズリ、内面口縁部ナデ	やや密	並	灰白 7.5Y7/1	約30%	
42	023-01	土師器 高杯	東田河道	20.0 台11.5	15.8	外面・内面ナデ 脚部内面オサエ	やや密	並	緑 5YR7/6	約40%	杯部がやや傾いている
43	008-02	瓦	東田河道	—	—	外面タタキのちケズリ、内 面布目肌	やや粗	並	灰白N7/0 灰 N6/0	—	
44	007-01	瓦	東田河道	—	—	外面タタキのちケズリ、内 面布目肌	やや粗	並	灰黒2.5Y7/3 灰白2.5Y7/1	—	
45	013-01	土師器 壺	東田河道	—	残高 6.0	外面口縁部ナデ、内面口 縁部ナデ	やや密	並	灰白 5Y7/1	底部の み	
46	019-05	土師器 杯身	西田河道	7.6	1.5	外面ナデ 内面ナデ	密	並	灰白 5Y7/1	約30%	
47	005-04	土師器 鍋	西田河道	—	残高 2.5	口縁部内外面ナデ	やや粗	良	にぶい黄緑 10YR7/4	口縁一 部のみ	口縁部外面にススが付 着している
48	016-05	陶器 皿 (山岳)	西田河道	8.6	2.6	外面体部へ内面口縁部ナデ 外面底部系切り	やや密	良	灰白 5Y7/1	完整	
49	014-06	陶器 碗 (山茶碗)	西田河道	底径 4.3	—	外面体部・内面口縁部ナデ 外面底部系切り	やや粗	良	灰白 2.5YR8/1	底部の み	ややひずんでいる
50	012-06	陶器 碗 (山茶碗)	西田河道	推定 底径 6.9	—	外面体部へ内面口縁部ナデ 外面底部系切り	密	並	灰白 2.5YR8/1	約30%	
51	012-07	陶器 碗 (山茶碗)	西田河道	底径 6.8	—	外面体部へ内面口縁部ナデ 外面底部系切り	やや密	並	灰白 2.5YR8/1	約50%	
52	017-10	陶器 碗 (山茶碗)	西田河道	高台径 7.5	—	外面底部系切り、高台部ナ デ、内面口縁部ナデ	密	良	灰白 2.5YR8/1	底部の み	
53	017-11	陶器 碗 (山茶碗)	西田河道	高台径 7.1	—	外面底部系切り、高台部ナ デ、内面口縁部ナデ	密	並	灰白 2.5YR8/1	底部の み	
54	017-12	陶器 碗 (山茶碗)	西田河道	高台径 6.8	—	高台部ナデ、内面口縁部 ナデ	密	並	灰白 2.5YR8/1	底部の み	
55	012-02	陶器 碗 (山茶碗)	西田河道	底径 6.3	—	外面体部へ内面口縁部ナデ 外面底部系切り	やや密	並	灰黄 2.5Y7/2	底部の み	
56	006-03	陶器 碗 (山茶碗)	西田河道	15.4	5.5	外面底部・高台部ナデ、外 面体部・内面口縁部ナデ	密	良	灰白 5YR8/1	ほぼ完 形	

第2表 出土遺物観察表№3

報告書 番号	登録№	器 種	出土位置 遺 構	法 量 (cm)		成 形・技法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	残存度	備 考
				口 径	器 高						
57	003-06	土師器 小皿	SD1	7.4	1.2	外面オサエ 内面ナデ	やや粗	並	にぶい黄緑 10YR6/4	約50%	
58	005-03	土師器 鍋	SD1	—	—	口縁部内外面ナデ	やや粗	良	淡黄 2.5Y8/4	口縁一 部のみ	
59	005-02	土師器 台付杯	SD1	底径 9.8	—	外面脚部指オサエ・ナデ 底部内面ナデ	やや粗	良	淡黄緑 7.5YR8/4	約30%	
60	005-01	土師器 台付杯	SD1	残高 2.5	—	外面脚部指オサエ	やや粗	良	淡黄緑 7.5YR8/4	約20%	
61	017-02	陶器碗 (山茶碗)	SD1	高台径 7.0	—	外面底部・高台部ナデ、外 面体部・内面クロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	約50%	
62	016-08	陶器皿 (山皿)	SD1	8.0	1.9	外面底部糸切り、外面体部 ・内面クロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	約50%	
63	016-10	陶器皿 (山皿)	SD1	8.0	2.3	外面底部・高台部ナデ、外 面体部・内面クロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	約40%	高台部に髹がら痕残る
64	017-07	陶器碗 (山茶碗)	SD1	高台径 7.6	—	外面底部糸切り、外面体部 ・内面クロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	底部の み	
65	017-09	陶器碗 (山茶碗)	SD1	高台径 7.2	—	外面底部・高台部ナデ、外 面体部・内面クロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	底部の み	
66	016-06	陶器碗 (山茶碗)	SD1	16.0	5.0	外面底部糸切り、外面体部 ・内面クロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	完形	
67	017-04	陶器碗 (山茶碗)	SD1	高台径 —	—	外面底部・高台部ナデ、外 面体部・内面クロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	底部の み	
68	017-06	陶器碗 (山茶碗)	SD1	高台径 7.8	—	外面底部・高台部ナデ、外 面体部・内面クロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	底部約 50%	
69	017-05	陶器碗 (山茶碗)	SD1	高台径 7.0	—	外面底部・高台部ナデ、外 面体部・内面クロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	底部約 30%	
70	017-03	陶器碗 (山茶碗)	SD1	高台径 6.6	—	外面底部・高台部ナデ、外 面体部・内面クロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	底部の み	
71	020-02	陶器碗 (山茶碗)	SD1	10.3	5.0	外面底部・高台部ナデ、外 面体部・内面クロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	完形	
72	017-08	陶器碗 (山茶碗)	SD1	高台径 7.1	—	外面底部・高台部ナデ、外 面体部・内面クロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	底部の み	
73	017-01	陶器碗 (山茶碗)	SD1	高台径 7.1	—	外面底部・高台部ナデ、外 面体部・内面クロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	底部の み	
74	016-09	陶器碗 (山茶碗)	SD1	16.0	5.6	外面底部糸切り、高台部ナデ、 外面体部・内面クロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	約50%	
75	016-07	陶器碗 (山茶碗)	SD1	16.0	5.7	外面底部・高台部ナデ、外 面体部・内面クロナデ	密	良	灰白 5Y7/1	約50%	

## &lt;遺物観察表凡例&gt;

報告書番号：図版に対応する番号である。

登録№：実測図作成番号である。

器種：陶器・土師器などの区別と、器種を表記した。

法量 (cm)：わかる法量を表記した。残高＝残部の高さである。

成形・技法の特徴：可能な限り表記した。

胎土：密・やや密・やや粗・粗の4段階で表記した。

焼成：良・並・不良の3段階で表記した。

色調：『新版 標準土色帖』（小山正忠・竹原孝雄編 9版 1989）を基準として表記した。

残存度：数値で示せないものを除き、残存の度合いを%と分数で表記した。

備考：以上の項目に該当しない特徴等を表記した。



版



調査前風景（北東から）



作業風景（北東から）



調査区北半（北東から）



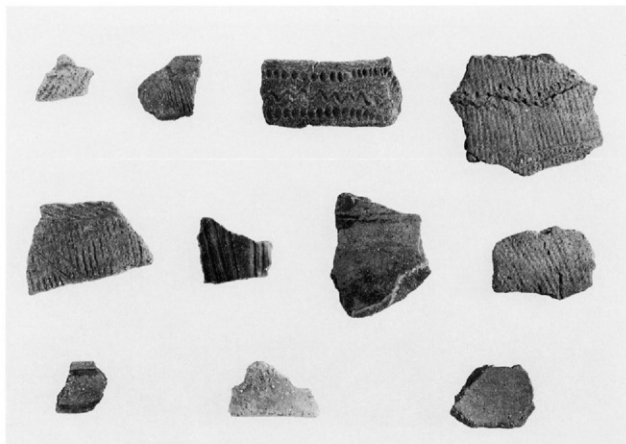
調査区全景（南西から）



東旧河道（南西から）



S D I（北東から）



縄文土器



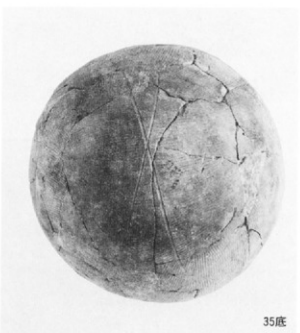
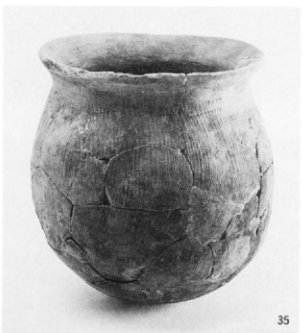
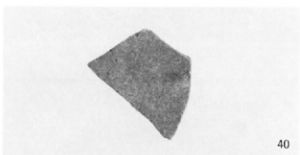
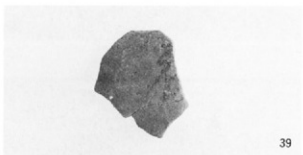
出土遺物 (1)

東旧河道出土遺物

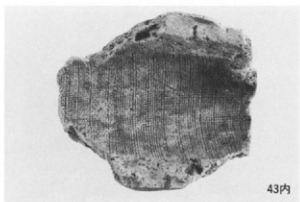


出土遺物 (2)





出土遺物 (3)



出土遺物 (4)



SD 1 出土遺物



出土遺物 (5)

# 報告書抄録

ふりがな	なかのがわらいせき だいにじ はっかつちょうさほうこく							
書名	中ノ川原遺跡（第二次）発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	182							
編著者名	松葉 和也・萩原 義彦							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732							
発行年月日	1998年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経			
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "	調査期間	調査面積㎡	調査原因
なかのがわらいせき 中ノ川原遺跡	みえけんまつぎかしやほだちょうあびなかのがわらいせき 三重県松阪市八重田町字中ノ川原 ふくまる ・福丸	242047		34° 34' 05"	136° 29' 20"	19970506 と 19970626	1,400	二級河川堀坂川小規模河川改修事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
中ノ川原遺跡	集落跡	縄文時代中期 古墳時代～中世	旧河道、溝		縄文土器、土師器甕・高杯・椀・鍋・皿、須恵器壺・杯身・杯蓋、緑釉陶器椀、山茶椀・山皿、瓦			

平成 10(1998) 年 3 月に刊行されたものをもとに  
平成 19(2007) 年 9 月にデジタル化しました。

---

三重県埋蔵文化財調査報告182

中ノ川原遺跡（第2次）発掘調査報告

1998年（平成10年）3月31日

編集 三重県埋蔵文化財センター  
発行 南第一プリント社  
印刷 南第一プリント社

---